

【小説部門・大谷文芸賞】

詫言

私立二松学舎大学附属高等学校 第1学年 中村 文音

『拝啓』

春寒に震えるこのごろですがいかがお過ごしでしょうか。封筒に花田花子と書きましたので、不審に思われているかと思いますが、私は決して怪しい者ではございません。花田花子は嘘ですが、過去に啓介さんという関わりのあった人間でございます。実はこうして筆をとっているのにはちょっとした理由があるのです。封筒の中にハンカチが入っていたかと思いますが、それは私が啓介さんからお借りしていた物です。返すのが遅くなりましたこと大変申し訳なく思っております。あんまりに昔のことですからきっと啓介さんは誰に貸したのか、本当に貸したのか覚えていらっしゃらないと思います。今一度、ハンカチを開いて見てください。貴方様のお名前が書かれているでしょう。油性ペンで書いたようなのでだいぶ滲んでしまっていますが、まだなんとか読めると思います。少し右肩上がりな字が啓介さんの筆跡だと証明してくれているはずです。本当はもっと早く、それこそ借りた次の日かその次の日くらいにはお返しする予定でいたのですが、どうしてもそのまままいこんでしまったようです。押し入れの片付けをしていたらなんとまあ、高校時代の、あら、どうでしょう書いてしまいました。

実はそうなのです。私は貴方と同じ高校に通っていた同級生の一人なのです。啓介さんはあの頃、狭山くんと仲が良かったと記憶していますがどうだったかしら。物理の先生の髪の毛が実はカツラだと知ると、一生懸命取ってやろうと画策していたり、校庭にホースの水で小学生みたいな下ネタをかいてこっぴどく叱られていたり、二人でそんなことばかりやっていたね。それから啓介さんがサッカー部だったことも私はよおく知っていました。なぜなら校庭が一望できるところが私の部活の活動場だったからです。週に4日、エースとして部を引っばっていた啓介さんは広いグラウンドでも一際目立っていました。それで…、そうそう話を元に戻しますと、つい先程、私は過去のクラスメイトの私物を借りパクしていたことに気がついたのです。そもそもどうして私が啓介さんのハンカチを手にすることになったかと言いますと、高校時代のことです。それはもう十年は昔のことになります。当時から鈍臭かった私は啓介さんとは違って運動がとても苦手です…。あの日はたしか、女子バレー部のジャンプサーブを顔で受け止めたのだと思います。ボールは綺麗に返りましたが、私は崩れ落ちました。きちんと腕で返せる啓介さんには分からないでしょうが、顔というのは本当に柔らかくて衝撃に弱いのです。倒れた私の元には心配してくれた友達やクラスメイトが円を書くように取り囲んでました。そこを掻き分けて駆け寄ってきてくださったのが隣のコートで試合をしていた啓介さんです。体育館の裏にある水道で、濡らしたハンカチを私の顔に当てて、先生を呼びに飛び出して行きました。あの

時の啓介さんはアクション映画のヒーローにも引けを取らないほど、精悍なお顔付で…。あの後ろ姿を私は一日たりとも忘れたことはありません。そしてそのまま保健室には運ばれた私は濡れたハンカチと共に早退しました。その日のうちに洗濯をして、先程も申し上げた通り次の日にはお返ししようと思っていたのです。しかしクラスメイトとはいえ大して関わりのなかった私達には普段から会話をするような機会はありませんでした。意気地なしの私はハンカチを返すだけのことに緊張して話しかけることができませんでした。もうこの際なので言ってしまいますと、あの頃の私は啓介さんに淡い恋心を抱いていたのです。きっとこれが私が勇気を出せなかった最大の理由なのだと思います。先ほど、大きな校庭の中でも啓介さんが特に目立っていたと書きましたけれど、もしかするとそれは鼻唄目かもしれません。ですからハンカチを持って駆け寄ってくださった時、とてもドキドキしたものです。きっと顔だって赤く染まっていたことと思いますが、それよりもボールに当たったことによる腫脹の方が酷くて気づかれませんでした。

とにかく乙女の恥じらいにより、私はそれから一年間借りたハンカチを握りしめながら啓介さんの周りをずっとぐるぐるしていました。教室の中ではもちろん、実は降りる駅が同じだったので帰りの電車の中でも。部活のない日はこっそりついて行って同じ電車に乗ったりしていました。一応言うておきますけれど、それ以外の怪しいことは何一つしていません。お家までついたりとか、窓に寄りかかって外を眺めている姿を盗み撮りするだとか、犯罪に手を染めるようなことは決して。ただ、お友達との会話に聞き耳を立てて、昨日は何を食べたかとか、一喜一憂していた微笑ましい恋だったのです。

こんなことを書いてしまう啓介さんは私が誰なのか気になってしまうかもしれませんね。でも決して私のことは思い出さないでいてください。私とその昔貴方に恋焦がれていたが故に貸したものも返さない軽いストーカー女だと知られたら今、正体を明かす訳にはいかないのです。卒業アルバムなんか見てあのとき顔面レシーブしたのは誰だったっけなんて考えないでください。ついでに言うと、アルバムの私はカバにも馬にも似た、要するに見せられないほど酷い出来なのです。そうなりますと、次に貴方様はこの手紙にお返事を書こうとお考えになるかもしれませんが、それもまたしないでください。なぜなら私は近々引っ越しをする予定だからです。花田花子は嘘ですが、その住所は本物です。お返事が届く頃にはそこに私はきっと居ません。今よりもずっとずっと遠い、地元から見ると地の果てくらいのところにこれから向かうつもりです。引っ越しに向けて荷物の整理をしている途中で啓介さんのハンカチを見つけてしまい、捨てることなんてできるわけがなく…、というのが手紙をしたための至った経緯なのでした。長々と書き連ねてしまいましたのでそろそろ終わりに致します。今までの思いを伝えきってしまったので随分とスッキリしました。おかげさまで新しい気持ちが新天地へ向かえそうです。

啓介さんもうどうかお体に気をつけて。末永いご多幸を遠くからではありますが、お祈りしています。

敬具

令和二年二月十八日

元クラスメイト

山本啓介様』

---

不思議な手紙が送られてきてから約半年後。高校の同窓会が地元で開かれると聞いてお盆休みに帰省した。同窓会自体は毎年開かれているというのに、出席するのは五年ぶりだ。それはあの手紙を読んだからというものもあるのだろう。俺は彼女が誰なのか心当たりがなかった。差出人は遠くへ引っ越したと言っていたから、きっとここには来ないだろう。名前だけでも分かれば。欲を言えば連絡先を聞いて少しだけやり取りがしたかった。別に邪な考えがあるわけではない。あくまで彼女の話をもう少し聞きたいと思っただけだ、と誰ともなしに弁解する。あの手紙の思い出話は自分が記憶しているものと少しばかり違っていたりした。俺はサッカー部のエースなんかではなくただの部室の鍵係だ。運動神経だって人並みで多分彼女が思うほどではない。誰しもそうであるように彼女もまた「片思いの男の子」への想いを綺麗に包装して、都合よく片付けたのかもしれない。そう思うと同時に、恋焦がれた“啓介さん”ではない俺を見て彼女はどんな顔をするのかが気になった。落胆か軽蔑か。想像してみるけれど、どちらも違う気がするのだ。もちろん俺が彼女のことを詳しく知っているわけではないのだが、なぜかそう思えた。今のままの自分でも受け止めてくれるのではないか。多分俺は彼女に恩愛のようなものを求めているのだ。たとえ俺がどうあろうとも彼女は無償で想っていてくれる。それは昔のような恋心ではないだろうけれど、そんな貴方でもいいと言ってくれる。そうであって欲しかった。それを聞いてどうしようと言うつもりはないけれど、まだ間に合うのなら隣に腰を据えて日常に少し風変わりな刺激が差しこまれたことで生まれただけのちょっとした好奇心。

「死んだよ」

久しぶりに再会した狭山は大人びて見えた。他のみんなもそう。多分俺だってそう見えているはずだ。変わらない奴なんていない、そのはずだった。

「……え、」

流石の狭山は元クラスメイト達をきちんと覚えていて、彼女が語った思い出話をしただけで名前と当時の風貌まで言い当てた。あの手紙の書き手は藤岡澄乃というちょっとタレ目の背の低い女子で、たしか保健委員で美術部だったそうだ。たしかに美術室からは校庭がよく見えた。働かない頭でそんなことを思う。

「死んだ、って？」

不思議と声が擦れた。おかしい話だ。ついさっきまで顔すら思い出せなかつたくせに。

「たしかガンだったかな、乳がん。若いから進みも早くて、数か月前に」

狭山はなんでもないことのように言っただけだ。きっとこいつにとってはなんてことないことなのだろう。俺だってあの手紙がなければきっとそのはずだった。多分、あの時彼女を助け起こしたのだからってちょっとしたヒーローごっこのようなものだったはずで、大切な

思い出として美化されていいものではないのだ。そう思うと罪悪感が胸がいっぱいになった。彼女は俺に騙されたまま死んだのだ。

気がついたら、俺は同窓会が開かれていた居酒屋を出て駅に向かっていった。藤岡澄乃は死んでいた。期待して挑んだ今日という日に掴んだのはそれだけで、けれどそれが全てだった。あの手紙の差出人はもうこの世にいない。知りたいと、知ってもらいたいと思っていた彼女とは二度と話せない。そう思うと言いやうがない喪失感が広がった。彼女の何を知るわけでもないのに一体なぜお前がショックを受けているんだ。胸の中から別の自分が問いかけてくるのを聞いてこの気持ちが悲しみなのだと気がつく。ガタガタと電車で揺られて視界が回った。ビール一杯しか飲んでいないはずなのにもう酔ったのだろうか。混濁した視界で周りを見渡すと学生時代に乗っていた電車だと気が付いた。先程までずいぶんとぼんやりしていたので恐らく来たものにそのまま乗りこんだのだろう。帰省中は実家に泊まる予定だったのでちょうどよかった。

耳慣れたアナウンスが車内に響く。それは自分が降りる駅。

——実は降りる駅が同じだったので——

不意に手紙の言葉を思い出した。そういえば、この駅で同じ制服を着ていた人を見ていたような気もする。もしやあれが彼女だったのかと使い物にならない脳みそで思った。

ホームから改札へと滑り降りるとすぐ目の前に分かれ道が現れる。自分の実家に向かうには右。流石に同じ道を歩いた覚えはないので、きっと彼女は左に曲がっていたのだろう。そちらは隣町に続いている。俺はしばらくの間ぼんやりと立ち尽くしてから、彼女が通っていたであろう道途に足先を向けた。それは特別意味のない行動だった。このまま帰っても眠れそうにないだろうから、少し散歩して帰ろうと思っただけ。俺は彼女に抱いた「純粹な興味」とやらが尽きていないだけだと、それ以外の感情は一切持ちあわせてはいないはずだと何度も何度も言い聞かせながら、馴染みのない地面を踏みしめていく。彼女はどこの道をどんな風に歩いていたのだろう、そんなことばかり考えながらひたすらに歩いた。そうしてヘトヘトになるまで隣町を歩き続けた俺はようやく家に帰った。疲れきっていたためか、ベッドに入ればすぐに睡魔が訪れて少しほっとする。彼女——澄乃のことはもう忘れてしまおう。今日のはちょっとした気の迷いだ、明日になれば心の整理もついているはず。俺は意識が遠のく寸前にそう思った。しかし次の日も気がつけば隣町を練り歩いていた。その次の日も、ずっとずっと何時間も。それはお盆休みが終わってからも続き、週末になれば地元に戻った。彼女の面影を求めるように「藤岡」と書かれている表札を探す。そのうちに死んだ女の暮らしていた家を見つけようと必死になっている自分が奇態に思えて堪らなくなった。どうしてこんなことを、と思うのだが足は止まらない。元凶となったあの手紙を少し恨めしく感じたりもしたが、部屋のどこからでも目の届く棚の上に返されたハンカチと飾られている様は、大切にしているのだと誰もが思うだろう。しばらくするとそこに水も置くようになって、更に経つと水ばかりでは飽きるだろうと缶ジュースや酒などもお供えするようになった。そのうち腹が減るからと仏飯器を買い求め、とうとう白

米では味気がないだなんてほざいてのりたまをかける頃には季節は一回りして、また冬がやって来ていた。澄乃からの便りをもらってからちょうど一年になる。その間俺は彼女の家を探し続けた。災害用に作られたハザードマップを手に、隣町に繰り出していく。藤岡の表札を探して――。

「どちら様ですか…？」

それは青い瓦屋根の家だった。俺は綺麗に撫でつけてきた頭を下げて、ぎこちなく笑みを作る。

「突然お伺いしてすみません。…澄乃さんにお会いさせていただきたくてお邪魔しました。山本啓介という者です」

言い切ってから彼女の名前を口に出したのは初めてだと気がつく。高校時代は大した会話もしなかったのだからそれも当然かもしれないと思った。彼女にも手紙のように「啓介さん」なんて呼ばれた覚えはない。そういえば、澄乃はどんな声をしていただろう。

「あらあら、ええどうぞ。上がってください」

彼女の母親であろう女性が、嬉しそうに俺を家の中へと招き入れた。タレ目は母譲りなのだ、なんてことを考えながら手土産を差し出す。それと同時に今更ながら高校の同級生であると告げると目尻りを下げて微笑まれる。

「あの子にもいいお友達がいたのね」

俺もまた微笑み返した。多少の嘘はご愛嬌だと自分を納得させて。

それから彼女の母親と色々な話をした。地元を出てからのことや仕事の話、東京の様子など俺が自身のことを話すのと裏腹に、あちらは澄乃についてとうとうと語った。大学に入って一年と経たずにガンが見つかったこと。一度は回復して就職したものの、また再発したこと。そしてそのまま帰らぬ人となったこと。

「あの子ったら、持っていたものほとんど捨てちゃったの。だからなにもないんだけど、よかったら」

そう言いながら二階へと案内されて、右側にある部屋へと通された。恐らく澄乃が家を出るまで使っていた一室だ。

「好きに見てて」

彼女の母親は高校のアルバムが隣の部屋にあると言って出ていった。その間、俺はお言葉に甘えて物色させてもらうことにする。とは言ってもあるのは勉強机の上に置かれている段ボール三箱ぐらいで、あとは清々しいほど何もなかった。開いて見てみると、中には通帳や印鑑、保険会社からの大事そうな手紙、それからまだ使える日用品など遺品と呼んでいいのかわからないような物ばかり出てくる。自分の家で使いきれなかったものを全て詰めこんだのだろうが、もう少し何かなかったのかと呆れてしまった。けれど彼女の母親が仕方ないといったように笑っていたのを思い出して、藤岡澄乃はそういう人間だったのだなと思い直す。彼女について知っていることは少ないけれど、これから知っていくことはできるのだ。ただ知ってもらうことだけはできない。

三箱目のダンボールは奥から四角い缶ケースが出てきて、手にとってみる。振っても音はしない。澄乃の大切なものだろうかと思うと好奇心が抑えられず蓋を開けてしまった。そして俺はすぐにそれを後悔することになる。

「山本さん？気分でも悪いの？」

いつの間にか戻ってきていた澄乃の母親が俺の顔を覗きこむ。自分でも血の気が引いていくのが分かった。缶ケースの蓋を閉めて元に戻す。

「いいえ、大丈夫です」

そうは言ったが、顔色は悪いままだし視界もぼやけている。彼女の母親の手の中には高校の卒業アルバムが握られていて、目に映すとそれだけで鼻の奥にじんわりと痛みが広がった。ここには駄目だと思い、もう暇を告げようと口を開く。

「あの、」

「…あの子に挨拶だけでもしてあげてくださらない？」

引き止められるように肩に手を置かれて、ハッとした。部屋の隅に立っているしきりの奥に仏壇が置いてあることに気がついた。自分の家のエセ仏壇とは違う、立派なものだ。真新しい女の写真が目に入って、これが澄乃かと思った。仏壇の前に座って動かない彼女をまじまじと見つめた。澄乃が写っている写真など片手で数えられる程度にしか持っていないし、それも十年も前のものだ。あの時よりもずっと大人びた澄乃がうっすらとした笑みを浮かべている姿はどこか魅惑的に感じた。俺はぼんやりとした手つきで、小さなお椀のようなものを叩いた。高く澄んだ音が部屋を満たしていく。手を合わせて目をつむると旨の中から彼女に話しかけた。

なあ澄乃、お前は俺に何個も嘘をついていたな。名前も、引っ越しをする、っていうのも、ハンカチを返すだけなんていうのも全部。だって本当の俺のハンカチは今ここに、お前の部屋の缶ケースの中に入っていたのだから。服も本も全部捨てて死んだお前が俺のハンカチだけは取っておいていたなんてあんまりじゃないだろうか。だって俺は澄乃が俺を好いていたなんて知らなかったんだ。成人しても社会人になっても、ましてや死ぬ瞬間まで俺を想ってくれていたなんて少しも想像しなかったのだ。あのハンカチを返したくないがために偽物を用意するだなんてことも、そこまでして手紙を送りたい相手が俺だったってことも。もしも俺がもっと気にしいでお前にハンカチを貸したことをちゃんと覚えていれば、俺がもっと周りを見ていて同じ駅から同じ電車に乗る同級生だと気がついていれば、こんな結末じゃなかったのかもしれない。きっかけはたくさんあったのに何もなかったのは俺だ。俺を好きになってしまったから何ひとつ報われずにお前は死んだのだ。ごめん、ごめんな澄乃。俺は鈍くて馬鹿な男だ。さすがのお前だって、どんな貴方でもいいと笑ってくれやしないだろう。いや、もし俺の勝手な想像通り受け入れてくれたとしても俺が自分を許すことなどきつとない。だから澄乃、ゆっくり休んでまた目覚めるときが来たら。今度は聡くて賢くて運動神経抜群でサッカー部のエースになれるような、そんな男を好きになってくれ。それまで俺は白飯にふりかけをかけ続けるから。

目を開けると、彼女の写真がパタリと倒れた。